

マーク・トウェインの旅 *The Innocents Abroad* についての研究ノート

A Research Note of *The Innocents Abroad*: A Record of a Pleasure-Trip of Mark Twain

島田由香

SHIMADA, Yuka

はじめに

「アメリカの近代文学はすべてマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』から出発している」と言ったのは、アメリカの文豪アーネスト・ヘミングウェイであった。

マーク・トウェインは、19世紀アメリカの生んだ偉大な作家のひとりである。『ハックルベリー・フィンの冒険』『トム・ソーヤの冒険』『王子と乞食』は日本でも明治末から翻訳され、日本の読者にも歓迎された。小説家として広範囲の読者を獲得した。しかし、トウェインは旅行作家としての顔もある。彼はたくさんの旅行記を書いた。ヨーロッパ、聖地への旅行記 *The Innocents Abroad* (以下、邦訳と同じ『赤毛布外遊記』もしくはIAと記す) (1869)、アメリカ西部への旅行記『苦難を忍びて』(1872)、ミシシッピー川を蒸気船で訪れ書いた旅行記『ミシシッピー川的生活』(1883)、サンドイッチ諸島(現ハワイ諸島)に滞在しサクラメントの読者に通信文を書いた『マーク・トウェインのハワイ通信』(1996)が死後出版された。世界講演旅行に基づく旅行記『赤道に沿って』(1897)、ヨーロッパのドイツとスイスを旅してまわった旅行記『放浪者外遊記』(1880)が挙げられる。トウェインが書いたアメリカ国内でなく海外についての旅行記は『赤毛布外遊記』『マーク・トウェインのハワイ通信』『赤道に沿って』『放浪者外遊記』である。特に人気を博し、トウェインの名をアメリカ中で不動のものとした作品は『赤毛布外遊記』である。この邦題は、日本では1951年に岩波文庫から濱田政二郎の翻訳があり、近年では『地中海遊覧記』という邦題で吉岡栄一、錦織裕之によって翻訳されている。『赤毛布外遊記』出版後、トウェインは『トム・ソーヤの冒険』『ハックルベリー・フィンの冒険』で新たな広範囲の読者を獲得していった。小論ではトウェイン文学の最初の成功作品としての『赤毛布外遊記』につい

て考察してみたい。まず、『赤毛布外遊記』を書くまでのトウェインが、受けた影響、取得した「書くこと」「語ること」の手法に着目し、彼の西部におけるジャーナリスト時代を考察する。さらに『赤毛布外遊記』においてトウェインが、何に興味を抱いたかを探っていきたい。

ヨーロッパ・聖地に向けての旅に出るまでのトウェイン

アメリカ独立宣言から59年しか経っていない1835年、マーク・トウェインはミズーリー州フロリダ(人口約100人)に生まれる。トウェインが14歳の時に兄のオーリオンがハンニバルに帰ってきて週刊新聞発行を始める。トウェインは兄の印刷所に移り、さまざまな名前で記事を書き始める。15歳でトウェインは書き手としてスタートする。文章を書き印刷所で編集し植字作業をすることは、学校に通っていないトウェインにとっては、印刷所が学校であったに違いない。1861年4月12日、南北戦争勃発後、兄オーリオンがリンカーン政府によりネヴァダ準州のカーソン・シティの知事補佐官に任命された。25歳のトウェインは、兄の私設秘書としてネヴァダ準州カーソン・シティに向け、セント・ジョセフから駅馬車に乗り西部の荒野を旅した。当時のネヴァダは、ロッキー山脈を越えた西の果てであったが1859年に銀鉱脈が見つかりシルバー・ブームで沸き返っていた。カーソンシティ到着後のトウェインは、最初の数か月は調査の仕事をしてしたが、投機家達が銀鉱堀に向かっていくのを見て、ついに採鉱熱に取りつかれ一攫千金を夢みる一人となった。また、『エンタープライズ』紙のジャーナリストも経験した。これまでは、さまざまなペンネームを使っていたトウェインだが、1863年27歳の時に『エンタープライズ』紙に書いた「カーソン便り」という紀行文で初めてマーク・トウェインというペンネームを使った。トウェインはジャーナリストとして西部の荒々しい男たちの生活、劇評など様々な取材活動を経験する。同時に彼は、

“journalistic hoaxing” (人かつぎ) という手法を取得する。これは、ありえないことを実にリアルに描くという手法である。この手法は、ネヴァダで下宿が一緒だった記者、ダン・デ・キルが教えた。この他にもトウエインは西部の開拓者・肉体労働者・承認・売春婦といった自由奔放な嗚声的な人物たちが混ざり合った西部でジャーナリストとして笑い話、小話を直接、耳で聞き、天性の書き手としての感覚の土台を作っていた。トウエインに影響を与えた人物としてアーテマス・ウォードの影響は無視できない。Walter Blairは、*Native American Humor*の中でトウエインがウォードから受けた影響の大きさについて述べている。

Mark learned a great deal about the art of humorous lecture from Ward. Mark learned from Ward not only the way to speak but also the way to write humorously. (Blair, 3)

トウエインは、人気講壇ユーモリスト、ウォードがヴァージニア・シティを訪問しているときに彼の講演におけるパフォーマンスに感激した。トウエインはウォードの話芸について*How to tell a story and others*の中で触れている。

Very often, of course, the rambling and disjointed humorous story finishes with a nub, point, snapper, or whatever you like to call it. Then the listener must be alert, for in many cases the teller will divert attention from that nub by dropping it in a carefully casual and indifferent way, with the pretense that he does not know it is a nub. Artemus Ward used that trick a good deal; then when the belated audience presently caught the joke he would look up with innocent surprise, as if wondering what they had found to laugh at. (Mark Twain, *How to tell a story and others*, 3)

そのすごさは、笑いの勘所をさりげなく使い、聴衆が笑いの勘所に気がついて笑い始めても、ウォードのほうは不思議そうに何も気が付かないふりをするのだと述べている。また、ユーモラスな話はアメリカ人のものでユーモラスな話はまさに何気なく言うことであり、語る側がいかに注意深く語っているかということである。これこそ聴衆を笑いに引き込む技術である。話を聞いている聴衆が大笑いしても真面目くさった顔で話を続ける“deadpan” (デッドパン、何食わぬ顔で滑稽な話をする) と呼ばれる語り口を取得した。このウォードの語り“deadpan” 「デッドパン」の手法をトウエインは取得し

た。ウォードとの出会いから3年後の1866年にはトウエイン自身が講壇ユーモリストとしてスタートを切った。トウエイン30歳であった。トウエインはウォードとの出会った後、ネヴァダを離れサンフランシスコに移った。『エンタープライズ』紙のサンフランシスコ通信員を経験しシエラ山中に行き、ジャッカス・ヒルに住む、酒場のバーテンダーで“yarn” (ヤーン、つくり話) の天才、ジム・ギリスと出会い、当時の西部のキャンプやサルーンで最大の娯楽として荒々しい男たちの間で語られていた短いユーモラスな話を聞いた。トウエインが、キャラベガス群のエンジェルスカンプの宿の酒場で老人ベン・クーンから「飛び蛙」の話を聞き、この話をもとに「キャラベガス郡の名高い跳び蛙」を書いて1865年12月『カルフォルニアン』誌に掲載された。トウエインは、語り話を活字にして成功した。マーク・トウエインのデビューとなったこの短編は好評で次々と全国紙に掲載され、アメリカ中の人々を惹きつけた。1865年10月、サンフランシスコに戻ったトウエインは兄オーリオンに宛てた手紙に以下のことを記している。

I never had but two powerful ambitions in my life. One was to be a pilot, & the other a preacher of the gospel. I accomplished the one and failed in the other... But I have had a 'call' to literature, of a low order-i.e., humorous. It is nothing to be proud of, but it is my strongest suit, & if I were to listen to that maxim of stern duty which says that to do right, you must multiply the one or the two or the three talents which the Almighty trusts to your keeping, I would long ago have ceased to meddle with the things for which I was by nature unfitted & turned my attention to seriously scribbling to excite the laughter of God's creatures. (Justin Kaplan, *Mark Twain and His World*. 60)

トウエインは、西部の一般大衆の中で生まれたユーモラスな話を楽しんだ。彼は、文学に目覚め、文学と言っても上等な種ではなく、ユーモラスな話を書くことを“call” 「神からの思し召し」であり自分の天命だと気が付いたのである。そして、自由奔放な話のおもしろさを文学作品にまで高めた。

最初の海外、サンドイッチ諸島へ

トウエインにとって最初の海外となったのは、当時まだアメリカに併合されていなかったサンドイッチ諸島である。1866年、トウエインは、『サクラメント・ユニオン』紙の特派員として現ハワイ諸島であるサンドイッチ

諸島に4か月間滞在してサクラメントの読者に向け通信文を書いた。1866年3月から6月まで合計25便の通信文を書いた。中垣恒太郎は「アメリカ合衆国に併合された場合、合衆国に対する国益がいかほどのものになりうるかを試算するなど、多角的な角度からサンドイッチ諸島の現状を捉えようとする姿勢がうかがえる」(中垣, 99)と指摘する。内容はサンフランシスコからホノルルまでの航路、船旅、情報、ハワイ航路の蒸気船に始まり、ホノルルの景色や特産物、ハワイの捕鯨について記し、さらにハワイ国王の宮殿、議会、フラダンス、キャプテン・クックについて記しハワイの現地の人々の様子や農園の様子を書いて送っている。当時のアメリカ人が見聞きすることがまれなことを紹介している。ユーモラスな文体の旅行記は好評で特に7月に『ユニオン』の紙面トップにスターブ記事「ホーネット号遭難事件」が載った。航海を終えサンフランシスコに戻ったトウェインは本格的な講演会を開く。約2か月間、国内を回り東部へ旅立った。25歳から30歳まで西部で過ごしたトウェインは、ジャーナリスト、ユーモリストとして“hoax”(人かつぎ話)と“yarn”(作り話)、“deadpan”(デッドパン)という手法を取得し、彼の文学的特質の形成に磨きをかけたと言える。まさに西部時代はトウェインにとって作家修行の場となった。

トウェインの興味

西部で作家としてスタートしたトウェインは『アルタ・カリフォルニア』紙の「遊軍特派員」として1867年、1月東部へ移った。トウェインは、ニューヨークに移り4月に『キャラベラス郡の名高い跳び蛙、およびその他のスケッチ集』が出版した。しかし、ユーモリストで人気が出始めた講演家であっても、この本の売れ行きは芳しくなかった。そこに当時絶大な人気を誇っていたヘンリー・ウォード牧師の教会において、チャールズ・ダンカンという敬虔な信者が中心となって、ヨーロッパ・聖地への船旅が企画される。旅費は1,250ドル。その他にパリ万博の見物や寄港先での観光と滞在に必要な費用が750ドル。当時のアメリカは、南北戦争終結後2年たったただけだが、奴隷制度によって支えられていた産業が崩壊し北部の産業資本が勢いをもち世界有数の工業国の道を走り始めていた。1853年に、ニューヨーク万国博覧会が開かれ、機械文明と水準の高い文化が紹介され、大陸間の交流が促された。アメリカ人はヨーロッパへの憧れを募らせていた。特に、東部の豊かな知識階級の人々は、ヨーロッパの文化に憧れていた。1867年パリでは万国博覧会が開かれ、出品者数6万、入場者906万人と1851年のロンドン万博を凌ぐものとなり成功していた。特にア

メリカ人が、ひと月に2万人近く押し寄せていた。トウェインは、この船旅に参加したくて『アルタ・カリフォルニア』紙に交渉し旅費を負担してもらい代わりに旅行記を送る契約をした。こうして、当時アメリカ人の誰もが関心を持っていたヨーロッパ・聖地の見聞に、東部の裕福で信心深い人々とともに巡礼団として6月から11月までの5か月間の旅に出た。この体験を基にして、帰国後、加筆訂正を加え1869年7月に『赤毛布外遊記』が出版された。この旅行記は、3年間で10万部売り、19世紀最大のベストセラーになった(飯塚, 80-81)。当時を代表する文芸誌『アトランティック・マンスリー』で文壇の大御所ウィリアム・ディーン・ハウエルズが、トウェインの文章を絶賛している。トウェインにとっての旅についての独自の見解は『赤毛布外遊記』序文に表れている。“This book is a record of a pleasure-trip.”と楽しい旅の記録だとトウェインは言い切っている。さらにトウェインの見解が続く。

Yet notwithstanding it is only a record of a pic-nic, it has a purpose, which is, to suggest to the reader how he would be likely to see Europe and the East if he looked at them with his own eyes instead of the eyes of those who travelled in those countries before him. I make small pretense of showing anyone how he ought to look at objects of interests beyond the sea—other books do that, and therefore, even if I were competent to do it, there is no need.

I offer no apologies for any departures from the usual style of travel-writing that may be charged against me—for I think I have seen with impartial eyes, and I am sure I have written at least honestly, whether wisely or not... San Francisco, 1869. (Shelly Fisher Fishkin(ed.), *The Oxford Mark Twain The Innocents Abroad.*)

トウェインは「旅行」を“trip”, “picnic”と表現している。一般的には「団体旅行」「周遊旅行」は“excursion”, “tour”である。トウェインが使っている“trip”は、「小旅行」「短い旅行」「刺激的な体験」という意味がある。“picnic”は、「遠足」「遊山」もしくは「満足な体験」といった意味がある。トウェインは、あえてこの旅を「小旅行の物見遊山の旅」と捉え、かつトウェインにとって、この旅は、「刺激的かつ満足した体験」だったのではないか。トウェインは、「私は、ありふれた旅行記の形式と一線を画した事で非難を受けても弁明するつもりはない」と言い、「公平な目」で見たと断言する。「私」“I”は、トウェインの「目」“eye”である。また、“he”「そのひと」とは、“reader”

「読者」だと記している。すでに旅した先人の眼ではなく、トウェインの眼で見ると、読者にはどう映るのかを知らせることが目的だと記している。トウェインは“usual style of travel-writing”のように見どころをガイドし読者に情報を与えるのではなく、彼の眼で彼が興味の対象が見えるがまま読者に伝えようとした。トウェインを意味する“I”は、ふたつの“eyes”を持っていた。ひとつは西部時代からのジャーナリストとしての眼である。もうひとつの眼は、面白く、いかに読者を喜ばすか考えているユーモリストとしての眼である。トウェイン以前の旅行記には見どころと情報があふれ、トウェインの『赤毛布外遊記』には事実とユーモアがあふれている。彼の興味の対象は何だったのか。石原剛が指摘するように「トウェインが旅行記を手掛け始めた19世紀後半は既にアメリカにおいては旅行記と言うジャンルが熟し、新鮮なアプローチからの旅行記を欲する状態であったに違いない。つまり外国に関する情報の少なさもありエキゾチシズムたっぷりに旅行記を書けば売れるといった初期のブームを過ぎて、作家が如何にオリジナルな視点を出して書くかということに読者の興味が移っていった時期であったことは想像に難くない」(石原, 12)。亀井俊介は「現代のリアリストの目」と指摘している(亀井, 417)。トウェインの『赤毛布外遊記』には、オリジナルの視点がある。彼が西部時代に培ったジャーナリストとユーモリストの視点である。トウェインの視点はどこに向けられたか。『赤毛布外遊記』には、人間があふれている。その土地の人間(老若男女問わず)の描写がユーモラスである。さらに、異国の地の描写の至る所にアメリカが出てくる。ヨーロッパ・聖地旅行記にもかかわらず目的地の描写と同じ量、もしくはそれ以上に自国アメリカについて述べている。旅行中、トウェインが積極的に興味を示した人間とアメリカ、この2点が、トウェインにどのように映ったのだろうか。

人間観察

トウェインのパターンは、先ず着いた土地の様子、風景、歴史レポートから入る。そしてすぐにそこに住む人々を観察している。土地の風景—住む人々—エピソードというパターンがある。エピソードは人間にまつわることである。たとえば初めて上陸したアゾレスでは風景をほめてすぐに人々の様子をレポートしている。住人は「裸足」「不潔」「乞食のようで貧しく怠け者でロバと変わらない」と述べている。さらに巡礼団仲間のブルーチャー氏がロバに翻弄される話が続く(IA 56-59)。ジブラルタルでも大岩の説明から始まるもすぐにガイドの人間観察を始める。「ムーア人の美女」「イギリス人守備隊」「三千年

前と同じ服装のユダヤ人」、同じ巡礼団仲間の「お告げ屋さん」「詩人」「疑問さん」がいかに厄介な人物かを説明し最後に手袋を買った店の女性店員とのやり取りをレポートして終わる(IA 69-75)。ジブラルタルの街並みなどお構いなしである。マルセイユでは、マルセイユの風景をほめた後すぐに税関職員の様子、カフェの店員、カジノでの人々の様子をレポートしている(IA 90-97)。さらにボレリー城館と博物館に行った時は、そこに行き着くまでの道の様子をレポートしただけですぐに城の地下牢にいたであろう囚人に思いを馳せている(IA 100-102)。フランスでは、パリ万博にはあまり興味を示さない。「素晴らしい博覧会だが我々が出会った世界中の国々からやってきた人たちの巨大なうごめきはなお一層素晴らしい見物だった」(IA 124)と述べ、見物は人間だとしている。雇ったガイドが、いかにいい加減ですごい食欲の持ち主で隙があればトウェインたちを土産物屋に連れ込もうとすること、いかにアメリカ人の観光客がいいカモにされているかをレポートしている。トウェインはガイドについて「巧みな策士」「アメリカ人をだまして金をとる」(IA 123)と手厳しい。ガイドにイライラするトウェインは、ガイドをからかう。自信満々に説明するガイドには、あえて、愚鈍なふりをして、ミイラを指して「この人、死んでいるの?」(IA 292)と聞く。過去の遺産ばかりを自慢するヨーロッパの人々への批判も感じられる。

トウェインにとっての見物は、人間であれば「刺青をした南洋諸島の原住民」「皇帝」「アラブ人」「乞食」も同じである。同格で並べ対照することで読者の笑いを誘い、インパクトの強さを読者に与え、余計な説明は要らなくなる。トウェインは、ベルサイユについて宮殿内の150の絵画陳列室を見て回ることが無意味に感じる。それらは大勝を賛美する戦闘場面が多かった。陳列品よりベルサイユは、華やかな衣装を身にまとう数千人の人が歩く、走る、踊るといった動きがあるからこそ美しい場所だと感じている(IA 154-156)。フランス皇帝ナポレオンとトルコ皇帝アジズのパレードを見ても、パレードをしている場所の説明もなく、2人の顔のつくりまでも細かく描写し、すべて見て満足としてさっさとホテルに帰ってしまう。

ここではトウェインの文体が面白い。

Napoleon III, Emperor of France!...—yet who was dreaming of a crown and an Empire all the while; who was driven into exile—but carried his dreams with him; who associated with the common herd in America, and ran foot-races for a wager—but still sat upon a throne, in fancy; who braved every danger to go to his dying mother—...(IA 127)

トウェインは、“but”, “who”, “—”, “and” をフランス皇帝とトルコ皇帝の描写に多用している。読者は、トウェインの語りがかえってくるような、間合いの呼吸を感じる。トウェインが皇帝という権力者に対しての反発を強調する効果が生まれた。パリのレストランでは、一般的には、旅行記ならばレストランでどのように注文すれば便利か、どこのレストランがお勧めでなんという料理がおいしいかがレポートしてあれば読者は喜ぶが、トウェインのレストランについてのレポートは、いかにフランス人の店員がいい加減でアメリカ人をいかにだましているかをレポートしているだけである (IA 149)。フランス人がごまかす時や困っているときに使う動作「肩をすくめる」「後ずさり」「肩を震わせ、両手を広げる」(IA 149) といった特徴を捉えている。『赤毛布外遊記』には一貫して生きている人間の魅力を伝えようとするトウェインの姿勢がある。歴史ある多くの遺跡、絵画、キリストにまつわる遺物についてほかの観光客と違う反応を書く。「いかにも貧弱で安物のつまらないものに見える」「遺物見学には飽きた」(IA 582)、ベニスのゴンドラは、「ゴンドラと言っても中央部に黒い霊柩車の車体をつけただけ」(IA 218) とぼささり切り捨てている。さらには、イタリアを代表する芸術作品「最後の晩餐」については、「最後の晩餐」を眺めている人々もユーモラスにレポートする。

People come here from all parts of the world, and glorify this masterpieces. They stand entranced before it with bated breath and parted lips, and when they speak, it is only in the catchy ejaculations of papture:

“O, wonderful!”

“Such grace of attitude!”

“Such dignity!”

“Such faultless coloring!”

“Such feeling!”

“What delicacy of touch!”

“What sublimity of conception!”

“A vision! A vision!”

I only envy these people; I envy them their honest admiration, if it be honest—their delight, if they feel delight. (IA 192)

トウェインは、絵から次第に消えてなくなってしまった驚異や美を、練達の芸術家でもない観光客の眼前に立ちあらわれることに疑問を持っている。トウェインは「この絵はまさしく昔、傑出した名画であったことを確信した。しかし、それは300年もまえのことだ」(IA 193) と断言し、人々が絵画について芸術用語を口から出まかせにしゃべることがイライラすると切り捨て「7,500人の人

がいるとしても、絵に描かれた顔が一体何を表現しようとしているのか、誰一人として言い当てることなどではしまい」と言い、「最後の晩餐」は絵の具が剥げた絵だとレポートしている (IA 192-193)。人間観察はヨーロッパから聖地に入っても続いた。聖書で名高い土地も荒涼とし、そこに住む人々の様子をレポートする。「ただれた目をした子供」「手足をきられたり、腐ったりしている子供たち」「女や子供たちはいずれも疲れ切って悲しげ」と人々の不潔さと、そこに住むアラブ人、イスラム教徒への蔑視をあらわにした表現になる (IA 468-472)。トウェインは、文明が遅れ、活気も無く貧しい聖地に嫌悪を感じている。旧約聖書に出てくる遺跡ヨセフの穴について、「クエーカー・シティ号から次の偶像破壊者、墓暴きの人の一分遺隊が到着するまで残っているだろうか。連中が来たら最後で穴ごと掘り返して持ち去ってしまうことであろう」(IA 493) と厳粛な記念物への畏敬の念などかけられもなく破壊すると言い切る。トウェインは、伝統的な権威を否定し因習を破壊したかったにちがいない。里内克己は「ガイドブックを通して外国の風物を見ようとする「巡礼者」たちと、自分の目で見ようとするトウェイン「罪人」との対立が、この旅行記の軸になっている」(里内, 305)。トウェインは、ガイドからの先入観やあらかじめ知識として植えつけられた先入観を拒否し、その土地に住む、集まっている人間を観察することで、旅先の現状を読者にレポートしている。

アメリカを見る

トウェインは、旅先で、観光名所の様子ではなくアメリカやアメリカ人について語ることが多い。旅先でアメリカについてレポートすることでアメリカの読者にアメリカの真の姿を認識させた。タンジールでアメリカの領事一家を例にして郵便配達の遅さをレポートしている (IA 88)。タンジールで生活している領事一家が手紙でも新聞でも飛びつくという様子からいかに国土の広いアメリカにおいてアメリカ人が郵便、新聞がスピーディーに配達されているかを伝えている。フランスの列車についても、のぼせあがってしまうほど素晴らしいと表現しているが、以下のように続く。

It is hard to make railroading pleasant, in any country. It is too tedious. Stage-coaching is infinitely more delightful. Once I crossed the plains and deserts and mountains of the West, in a stage-coach, from the Missouri line to California, and since then all my pleasure trips must be measured to that rare holiday frolic. (IA 106)

トウェインがアメリカ西部2,000マイルを旅した時の素晴らしい体験を生き生きと伝えている。「息をのむ展望が広がる無限の大絵巻パノラマである」と絶賛する光景は、トウェインが今乗っているフランス鉄道ではなくアメリカ西部の駅馬車からの光景である。トウェインは今居るフランスを忘れ、心はアメリカ西部に飛んで行ってしまっている。読者もトウェインと一緒にフランスの「ブドウ畑」「中世の教会」「ローヌ河」(IA 103) から一気に「カモシカ」「バッファロー」「ウィンドリバー山脈」(IA 107) といったアメリカ西部の風景に思いを馳せるだろう。トウェインのアメリカ絶賛は、コモ湖では、カリフォルニアとネヴァダの州境にあるタホー湖と対比させアメリカのタホー湖の透明度、幅の広さの素晴らしさを褒め称えている。コモ湖を「息をのむほど華やかな美しさであった」「一幅の絵のような美しさ」(IA 203) と褒めつつも「タホー湖の驚くほどの透明度に比べると、湖水のさえないこととまったく」とタホー湖賞賛に移り始め、コモ湖を眺めながら以下のようにコモ湖への見方に変化する。

As I go back in sprit and recall that noble sea, reposing among the snow-peaks six thousand feet above the ocean, the conviction comes strong upon me again that Como would only seem a bedizened little courtier in that august presence. (IA 204)

結局、トウェインのタホー湖自慢になった。

フランスのアニエール公園では公園の所有者がアメリカ人で、公園内に立派な建物があり屋根には星条旗が翻っていて人でにぎわい花火やサーカスが行われているとレポートする。さらに「我々がフランスで出会った中で飛び切りの美人と言えば、アメリカ生まれのアメリカ育ち生粋にアメリカ娘だった」と誇らしげにレポートしている (IA 134-138)。星条旗レポートは、トウェインたちがニューヨークを出発して1か月もたたないうちに触れている。ジブラルタル海峡に浮かぶ帆船に掲げられた星条旗を見つけ、「帽子やハンカチがちぎれんばかりに振られ、歓声が沸きあがった」と感動をレポートする。星条旗への想いは続く。

She was beautiful before—she was radiant now. Many a one on our decks knew then for the first time how tame a sight his country's flag is at home compared to what it is in a foreign land. To see it is to see a vision of home itself and all its idols, and feel a thrill that would stir a very river of sluggish blood! (IA 64)

まさに、トウェインにとって星条旗は国の象徴である。

トウェインは比較することでアメリカの良さを読者に伝えている。イタリアで「アメリカの乞食一人に対して、イタリアには百人の乞食がいる」「彼らには本当の宗教—つまり、われわれアメリカ人が持っているような信仰心には欠けているのだが」、イタリア人は3,000年乾燥してきたように同じ木塊で畑を耕すが、アメリカ人は「自分たちの祖先よりずっと賢く」鉄で作った鋤を使うと比較する (IA 258-261)。「石鹼がない」パリ、「石鹼がある」アメリカ (IA 98)。イタリアの川幅が広いテーレベ川と、もっと川幅が広いアメリカのオハイオ川、ミシシッピー川、ハドソン川 (IA 260)。囚人についてもイタリアはコロセウムで囚人をコロセウムに投げ込み野獣を放ったが、アメリカでは「囚人は罪を償うと同時に、社会の役に立つようになっている。囚人たちに仕事の下請けをさせ、樽を作ったり道路を建設させたりして金を稼がせ国庫に納めさせるようにしているからである」(IA 277)。対比することで、さらにアメリカの合理的さや文明の高さが鮮明になる。また26章では、トウェイン自身をローマ人と仮定し、ローマ人トウェインがアメリカへ行き、見て学び、ローマに戻り故郷に人々の前で輝かしい発見者となるだろうと、彼のアメリカ観が語られる。アメリカの宗教については「アメリカは重苦しい感じのする教会はない」、政府は、外国の政府に保護されることなどない政府であり、誰もが美味しい水が飲め、火事になれば消防車がすぐに駆けつける。イタリアでは、自ら耕した土地は貴族から借り受けるがアメリカでは完全所有できる。アメリカの人々は、どこにでも移動し住むことができ、土地や家屋購入できる。金持ちになれる。教育は、アメリカには学校が数千あり誰でも勉強でき子供たちは字が書ける。職業も自らの意思で選べる。本はあふれていて、アメリカには本や新聞を一時間で数千印刷できる、大きな機械もある (IA 266-267)。アメリカとローマを対比することでアメリカが、いかに教育・文化水準が高く規制や価値観から解放されている自由な精神を持つ国だと自慢している。

トウェインは、旅行記の基点に人間とアメリカの2点を置き、西部時代に取得したユーモアの手法とジャーナリズムを融合し新しい旅行記の形を作った。

結

『赤毛布外遊記』の扉には以下のように記されている。

The Innocents Abroad or New Pilgrims Progress;
Being some account of the steamship Quaker City's pleasure excursion to Europe and the holy land; with descriptions of countries, nations, incidents and

adventures, as they appeared to the author. (IA)

トウェインはこの本を“pleasure excursion”と定義した。そして「著者の眼に映った諸国遊覧、事件、冒険を記す」としている。著者は、“innocents”「無垢な人々」であるアメリカ人旅行者の一人であるトウェインである。トウェインは、『赤毛布外遊記』を話し言葉で書いた。これによって読者にはヨーロッパが臨場感あふれる身近な世界として伝わったはずである。その結果、当時アメリカの人々がヨーロッパに対して抱いていた過剰な憧れやその反動ともいえる引け目や劣等感から人々を解き放つことができたのではないか。ラーザー・ジフはトウェイン自身が旅行から得たことを *Return Passages* で記している。

Through travel Twain learned to unlearn sham beliefs and Innocent abroad is full of the fun of such unlearning. (197)

トウェインは、既得の知識や価値観に振り回されず「アメリカ人」としてあるがままに生きていくことの幸福を読者に認識させた。トウェインは、あとがきでクエーカー・シティ号について書いている。

Whenever we were coming back from a land journey, our eyes sought one thing in the distance first-the ship-and when we saw it riding at anchor with the flag apeak, we felt as a retouring wanderer feels when he sees his home. When we stepped on board, our cares vanished, our troubles were at an end-for the ship was home to us. (*The Innocents Abroad* 649)

クエーカー・シティ号こそ、旅行中のアメリカ人トウェインにとっての「アメリカ」であった。そして、ヨーロッパ、聖地の旅は、異国を旅しながらも強烈なまでにアメリカを感じたトウェインにとっては「アメリカ発見」の旅であった。トウェインにとって旅行記を書くことは“a perfect vehicle for Twain’s imagination” (Ziff, 174) となり、自由な精神を持つアメリカを発見したトウェインにとってこの旅行は意義深いものになった。

(*The Innocents Abroad* の翻訳は、マーク・トウェイン『地中海遊覧記』上・下 吉岡栄一、錦織裕之訳を必要に応じて、多少の変更を加えて使用させていただいた。)

引用・参考文献

- Justin Kaplan, *Mark Twain and His World*. New York: Simon and Schuster, 1974.
- Larzer Ziff, *Return Passages*. New Haven and London: Yale University Press, 2000.
- Mark Twain, *How to tell a story and others*. United Kingdom: Lighting Source UK Ltd, 1994, p.3.
- Shelly Fisher Fishkin (ed.), *The Oxford Mark Twain The Innocents Abroad*. New York: Oxford UP, 1996.
- Walter Blair, *Native American Humor*. San Francisco: Chandler Publishing Company, 1937
- 飯塚英一『旅行記作家マーク・トウェイン 知られざる旅と投機の日々』東京：彩流社、2006.
- 石原剛「マーク・トウェインと旅」『マーク・トウェイン研究と批評 第4号』南雲堂、2005.
- 飯塚英一『旅行記作家 マーク・トウェイン 知られざる旅と投機の日々』彩流社、2006.
- 亀井俊介「罪人としての旅」『地中海遊覧記』下 吉岡栄一訳、彩流社、1997.
- 里内克己「マーク・トウェインと世界」『マーク・トウェイン文学/文化事典』亀井俊介監修、2010.
- 中垣恒太郎「『マーク・トウェインのハワイ通信』」『マーク・トウェイン文学/文化事典』亀井俊介監修、2010.
- マーク・トウェイン『地中海遊覧記』上・下 吉岡栄一、錦織裕之訳、彩流社、1997.